

和漢のコードと自然表象

十六、七世紀の
日本を中心に

島尾新・宇野瑞木・亀田和子（編）

【目次】

序……………島尾新……………4

総論……………宇野瑞木……………6

● I 「内在化」のかたち

室町時代における「漢」の「自然表象」……………島尾新……………14

二十四孝図と四季表象——大舜図の「耕春」を中心に……………宇野瑞木……………30

日光東照宮の人物彫刻と中国故事……………入口敦志……………46

◎コラム「環境」としての中国絵画コレクション……………

——「夏秋冬山水図」（金地院、久遠寺）における
テクニストの不在と自然観の相互作用……………塚本麿充……………55

江戸狩野派における雪舟山水画様式の伝播

——狩野探幽「雪舟山水図巻」について……………野田麻美……………63

四天王寺絵堂《聖徳太子絵伝》の画中に潜む曲水宴図……………亀田和子……………78

◎コラムモノと知識の集散——十六世紀から十七世紀へ……………堀川貴司……………96



●Ⅱ コード化された自然

「九相詩絵巻」の自然表象——死体をめぐる漢詩と和歌……………山本聡美 101

『源氏物語』幻巻の四季と浦島伝説——亀比売としての紫の上……………永井久美子 115

歌枕の再編と回帰——「都」が描かれるとき……………井戸美里 124

十七世紀の語り物にみえる自然表象——道行とその絵画を手がかりに……………糸 汐里 141

寛政期の京都近郊臥遊……………マシュー・マツケルウェイ 155

●Ⅲ 人ならざるものとの交感

人ならざるものとの交感……………黒田 智 170

金春禅竹と自然表象……………高橋悠介 180

「人臭い」話（ひとくさい）資料稿——異界は厳しい……………徳田和夫 194

お伽草子擬人物における異類と人間との関係性

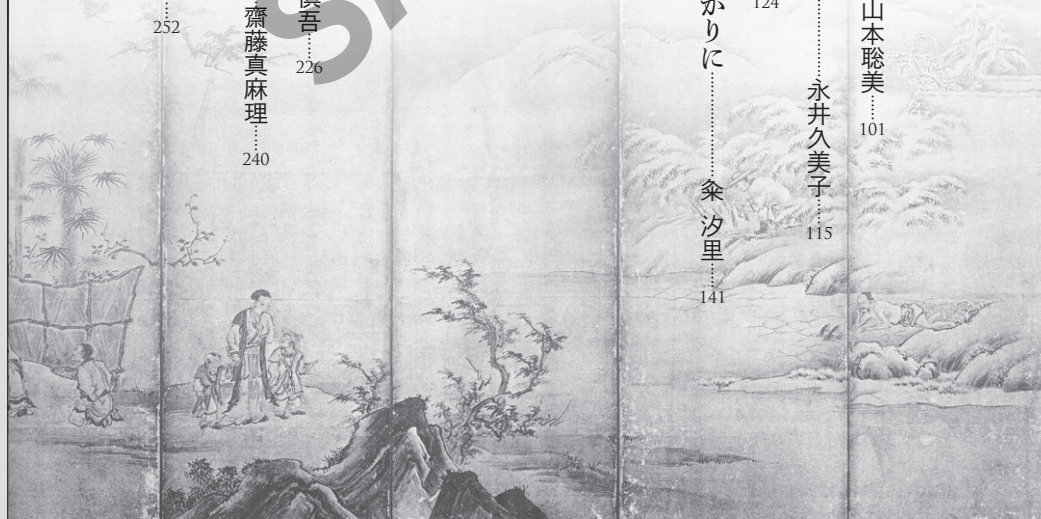
——相互不干渉の不文律をめぐって……………伊藤慎吾 226

室町物語と玄宗皇帝絵——『付喪神絵巻』を起点として……………齋藤真麻理 240

エコクリティシズムと日本古典文学研究のあいだ

——石牟礼道子の〈かたり〉から……………山田悠介 252

あとがき……………亀田和子 267



序

島尾 新

「自然表象について」と言われた途端に「また nature か」と身構える。東アジアの古い時代をやっている者の習性だろう。『老子』から始めて「私たちの「自然」はちよつと違う」との説明を、繰り返さねばならないのかと思うから。自然は「自ら然る」ありままの状態で、山水・林泉も含むけれども、テーマの基本は「人の心のありよう」。それが仏典の漢訳にも使われて、日本では「じねん」と読まれ、親鸞も「わがはからわざるを自然と申すなり」といつている……。

しかし、本書のもととなったワークショップの企画者・宇野瑞木さんの視点は違っていた。タイトルの「自然表象」の裏にあるキーワードは、「エコクリティシズム (ecocriticism)」と「二次的自然 (secondary nature)」そして「心性として把握される自然」だった。「エコ」つまり environmental communication ならば「環境」との関係だから、「自然」の定義なんぞはスキップして、そう呼ばれているものとの関わり方について語ればよい。その一例として提示されたのが、ハルオ・シラネさんの secondary nature で、平安貴族の「自然」は、彼らの世界に取り込まれ、特に和歌の世界にコード化され再構築された二次的なシステムだという。

ここからはいくつかの議論の方向が思い浮かんだ。シラネさんの論は、西洋流の「一次的自然」と比べてみれば日本では、というもの。あちらの枠組みと照らし合わせることで浮かび上がるものがある。「和漢の構図」が大きく変化する時期について、それをやってみるのも面白い。そして「二次的自然」は「心性として把握される自然」でもある。本書が扱うような「表象」たちには、リテラルであれヴィジュアルであれ、内在化された「自然」が表出されている。そこからは、もちろん nature との関わりも読み取ることができるはず……。

私にとってはこんな感じで、一昨年暮れのワークショップがやってきた。「和漢の故事人物と自然表象——十六、十七世紀を中心に」というタイトルを含めて、開催直前まで規模も内容も揺れながら膨らんでゆき、議論を開いてゆこうという多彩な視点からの発表と、ディスカッサントの的確なコメント、そして夜には文字どおりの symposium も付け加わって刺激的な会となった。その内容を纏め直した一冊をお届けできるのは嬉しいこと。このような企画を発想し、最後まで面倒を見て下さった宇野瑞木さんと亀田和子さんには、ほんとうにご苦労さまと、編集の労を取って頂いた吉田祐輔さん、武内可夏子さんそして勉強出版には心から感謝の意を表したい。

以前に「日本三景」の展覧会を広島・京都・仙台を巡ってやったとき、企画者の知念理さんが「理科系の自然」と「人文系の自然」がある、と言ったのを思い出す。屋久島の杉のような手つかずの自然に対して、歌に詠まれ数々の物語を身に纏う「三景」も、松島はほとんどありのままだが、厳島は聖なる山と人工の神社との複合体、そして現在では人の手が加わらねば存続し得ない天橋立など、その nature は様々である。私は雪舟の絵を通じて天橋立に関わることになったのだが、景観保存を含めたランドスケープ・デザインや土地の歴史の観光資源化などの現在の課題については、あまり有効な話が出てくる気がしない。もしかしたら、歴史・文学史・芸能史・美術史などの研究者を交えての、「自然環境」に通じる議論の回路が開けるかも知れない。そんな期待も込めての一冊である。まずは宇野さんが設定した問題空間を聞くとところから始めたい。